

---

# 三雲鉄道日記

夕霧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三雲鉄道日記

### 【Nコード】

N3267L

### 【作者名】

夕霧

### 【あらすじ】

戦記の馬鹿がブログでやってた愚行の結晶、それはこの小説！  
超のんびり更新、鉄道研究会部員が贈るこの作品、興味あつたらせ  
ひ。

一話目 回生失効(前書き)

最初はブログで出してた奴を

## 一話目 回生失効

2月12日

午前10時5分

三雲駅

透いた蒼とピンクでデザインされた三雲鉄道最新車両E531系の車両が走ろうとする。

10時8分三雲駅発、各駅停車竜宮行きが出ようとする。

「おお、これがワンハンドル。」

感嘆を漏らすのは、三雲運転区所属運転士、神田功「かんだこう」である。彼は本線三雲線と違う支線の弥生線の運転士で、研修を除いて今日が三雲線初乗務だった。

「初めての最新車両だ。緊張する。」

彼は運転席に座り緊張する。弥生線にはもちろんこんな新しい車両は無く、三雲線の研修でも古い鉄道ばかりだった。彼は精神集中する。そこに発車ベル。

「よし、行くぞ。」

扉が閉まる。

「出発進行！」

彼は指さしハンドルを手前に倒す。電車は静かに動き出す。

「おおお・・・！！」

神田は思わず感激。弥生線の車両は急加速するため、すこしまスコン入れて、少し経ってからフルスロットルに対し、これは自動的に段々電車の加速力を上げるシステムが付いていた。しかも電車の音は静か。さすが最新車両。

「第一閉塞よし！制限解除！」

彼は少し興奮する。しかし、ここで乗務前に聞いた事を思い出す。

それは三雲線で仲良くなつた先輩の言葉。

「神田、初乗務の車両は何だ？」

「あ、Mの2212、あの最新車両です！」

「あれか!!」

先輩が驚き哀れみの目で見る。

「何ですか？」

「あれ、昨日からハイブリッドなんだ。」

「はい？」

「運転すれば分かる。頑張れ！」

「え、ちょ！先輩?!」

先輩は笑いながら立ち去る。一体何なんだ。しかし答えはすぐ分かった。

10時10分

そろそろ停車駅、神田は停車しようと。ブレーキをかける。

「三雲北停車、車両10・・・て、え！」

彼は確かに制動力を最大限にしているのに制動がかかりにくい。これもしかして・・・。

回生失効!!

レールから得る電力でモーターにブレーキをかけ、そこから電力を得てその電力を線路を伝い後方の電車の電力としてまた使うというリサイクルが出来る。これを回生という。しかし、時には、その電力が足らず。電力ブレーキが行われず。電力ブレーキと併用して起動する空気圧ブレーキの許容範囲を越え、ブレーキの効力が完全ダウンすることがある。これが回生失効。

これはオーバーランする!!直感した神田は素早く横にある強制制動器を作動させ空気圧ブレーキを緊急最大にする。

ギギギギ!!

最新車両では考えられない車体の軋み音、ようやく回生ブレーキが回復してその音はすぐに消えたが、そのあとブレーキをかけすぎて駅構内再加速をするはめになった。後の運転では特に支障は出さず。

M2212は即日車庫行き、10日後に復帰した。神田は最新車両は当分乗りたくないと思った。

鉄道日記第一話。疲れました。一応テーマは「プリウス」でのブレーキ低下の原因が回生失効もあつたので、こんな感じにしました。プリウスのハイブリッドの回生ブレーキは、実は鉄道では40年前から実用されてて、鉄道運転士にとって、プリウスの時折のブレーキ能力の低下は普通だと感じる。今回の神田の回生失効は、分かりやすいように「多分」少しオーバーリアクションにしてみました。現実では運転士はプロですので、回生失効起きても冷静に対応してくれまのでご安心を。

#### 登場人物紹介

神田功 28歳 168cm 58kg

三雲南工業高校卒業

18歳で三雲鉄道入社、弥生線、宮科「くしな」駅配属

22歳で弥生線八波車掌区車掌昇格

24歳で弥生線瑞穂運転区運転士昇格

28歳で三雲線三雲運転区転籍

性格

基本的に真面目で、時折どこか抜けてる。緊急時の冷静な対応は高い。弥生線から選抜あれて三雲線に来たが、弥生線に戻りたいと思っている。

## 一話目 回生失効（後書き）

これは日本皇國軍、ACE COMBATの合間で書きますので更  
新、恐ろしく遅いです。

## 第二話 電車の停止とストレスの比例式 前編

3月3日

14時33分

雛菊線 戸井山駅近く

811系8両編成を運転する人、三雲線から臨時で派遣された神田である。

「俺は派遣社員でも傭兵でも無い!!!」

三雲線から早々にいきなりの雛菊線応援派遣。

「弥生線で同じ車両走らせてたから大丈夫でしょ!」

助役の声を思い出す。くそ! やつと三雲線に慣れたのに! 彼は三雲鉄道運転士の誇りがあるが今日は三雲鉄道に愚痴っている。今日は雛まつり、雛菊線の終点雛菊駅では3月1日から7日まで有名神社で雛祭りが行われてる。そのため、いつもは朝夕ラッシュ以外乗降人員がが少ない雛菊線でもこの日、特に3日は非常に多い。しかも今回は休日と重なり、駅員運転士車掌「場合により他駅他線の駅員運転士が応援に送られる。」総動員の、臨時便車両も出しているのてこ舞いだ。とにかく今は仕事に徹するのみ! 神田は駅近くにかかる。

「戸井山駅停車・・・ん?」

信号機がおかしい、青が出てて赤が出てる。即座に神田はブレーキをかける、同時にモールスブザーで車掌に前方異常発生を伝える。

「これは・・・指令室だな。まず車掌。」

即座に通信してよいか確認通信して返信貰うと、通信電話を取り車掌にかける。

「はい、こちら上山です。どうしまたか? 事故ですか?」

雛菊線雛菊車掌区の女性車掌、上山絵奈「かみやまえな」である。

三雲鉄道特に下記に書くが、レールウェイでは女性職員が多い方で、特に雛菊線は多い。と言ってもJR山手線の女性職員のチート並の多さは無いが。

「ああ、人身ではないが、信号トラブルだ。」

「え……。」

「どしたの？」

「今日、この車両には乗降率は常に150%、大抵の人間は30分が限界、しかも今日はひな祭りで子供が多いのでストレスに達しやす……。」

「……やばいな。ストレスがピークに達したら……。とにかくアナウンスはしてくれ。」

「了解。とにかく早くお願いします。」

「分かった。」

通信を切ると次は指令室だ。

「こちら運行通信指令室、どうしました？」

「こちらH1678運転士、神田功です。戸井山駅前の第一場内信号が青と赤が出ておかしくなってる。早急に直してもらいたい。」

「了解した！こちらでは青と表示されてるのに……。」

「とにかくお願いします。」

「分かった。早く調整しないと。やばいぞ……！」

「やっぱりですか？」

「当たり前だ！今日は……もういいや、早く直す。H1678はとにかく待機！通信？001、通信者末田。」

「了解。通信終了。」

神田が通信電話を置くと、上山の声。

「現在信号トラブルの影響で電車が止まっています。お急ぎの所お客様にご迷惑おかけしますことに深くお詫び申し上げます。」  
「さすが女性声、澄んでるな。と神田は変な方向に感心する。」

14時37分

三雲鉄道運行指令部

「嘘だろ。」

運行指令室の交通主任、末田篤「すえだあつし」が天を仰ぐ。

「直らねえ。」

信号システム系統が直らない。これは10分で済まない。これは非常事態だ。

「今すぐ運行部長に連絡しないと！」

末田は走り出して、坂口さかくちのぶお信夫運行部長の所に駆けよる。

「坂口運行部長！」

「どうした末田君、雛菊線は既に全線停止状態に陥るぞ。」

「それが、信号トラブルがこちらでは直せなくて……至急三雲レールウェイスタッフの雛菊地区保線事業部に連絡を。」

三雲レールウェイスタッフ株式会社

三雲鉄道の本線である三雲線、弥生線、十河線とじうを除く、雛菊線、児玉線、緑風線の、全線の駅員、運転士車掌、そして前者の本線を含めての全線の保線及び車両点検をしている三雲鉄道グループ最大の子会社、いや、すでに中小鉄道会社だ。このレールウェイスタッフの路線は昔は違う会社の路線で、それを合併した際に、三雲鉄道の子会社として独立した。東武鉄道の、東上事業部みたいなものだ。待遇は本線もレールウェイも一緒に、子会社による差別待遇はない。ちなみに、運転士の神田は三雲鉄道の社員、車掌の上山は三雲レールウェイの社員、末田は三雲鉄道の社員だ。ちなみに運行司令は三雲鉄道レールウェイ全線共に三雲鉄道運行司令部が行う。

話がそれた、本編に

「分かった、しかしなぜ今日なんだ！日曜日で3月3日、最高にお客様の多い時間帯に！」

「分かりません、神様も恐ろしくDSな試練を出しますよね。」

「悠長にそんな事言うな、早くよう……」

「運行部長！」

「今度は何だ！」

末田の同期が走ってくる。

「雛菊線、戸井山駅場内信号、雛菊駅第一第二構内信号、三雲南駅、三雲中央自然公園駅間第二閉塞信号、山宮駅、古見駅間の信号シス

テム全体異常発生、三雲鉄道運営上緊急事態宣言です！」

「なっ……。」

「本当についてないね……。」

「至急社長に報告だ！他の線も一応確認作業するよう保線事業部に連絡、運行指令室総動員で確認作業！」

「……おう！」

全員が車両に連絡や確認に走る、保線事業部の人も走り出す。

「最悪、車両から降りてもらい運休を……。いや、今じゃ提携バス会社が総動員でも……。」

坂口が呟く。

「とりあえずお客様には平謝りを貫け！状況に異変あったならすぐに報告！」

末田は雛菊線の全線モニタを見る、完全に信号が狂ってる。何で第一が停止で第二が進行なんだ？

混乱は更に極まる。

14事55分

戸井山駅前

「そろそろ切れる組が居たら怒鳴りこむ頃だな……。」

神田は時計を見て呟く、車掌時代にはそれで苦労したことがあるからだ。これが理解ある大人が多ければいいんだが、今回はちびっこも多いし、多分祭りで酒を飲んでしまった大人もいるだろう。

「上山さんは女性だ。もしもの時は援護に入るか。」

女性差別では無く、純粹に彼女が心配になる。むかし怖いお兄さんが乗務室ドンドン叩いて大声出した人……。あれ困ったな、警察に出したら、広域暴力団の構成員で、刺されなくてよか……

「ん?!」

閉じめ灯滅、扉が開いてる?!いきなり通信確認、すぐに返信して電話機を取る。

「神田運転手！6両目の第2扉を手動で開けてしまった人が居ます、

線路上に降りてます！」

「くそっ！」

神田は電話機を置くと、外に出る。

**第二話 電車の停止とストレスの比例式 前編（後書き）**

喧嘩始まる！

オーバーリアクションで行きます。

**第三話 電車の停止とストレスの比例式 中編（前書き）**

久しぶりです。

試験終わったので、また更新します

### 第三話 電車の停止とストレスの比例式 中編

3月3日

14時56分

線路上

7、8人のお客が降りていく、それを見た上山が乗務室から降りて、「お客様！危険ですから早く車両にお戻りください！」

「ああ？ここまで待たせといてもどれだ？さつさとホームに連れられてよ姉ちゃん！」

ああ、典型的な不良、しかも未成年にしか見えない子もお酒臭い。離まつりの困った点、家族で来る人もいれば、このように、祭りに乗じて遊びに行つて羽目外して補導、逮捕される人たち、毎年地元ローカルテレビ局のニュースがやってる。しかし彼女もこうゆう事態になるのは車掌勤続2年、駅員合わせて6年で初めてだ。

「良く新聞でやってるだろ？電車が止まったらお客を線路上歩いて近くの駅に誘導するんだろ？」

「それは特例で、こうゆうのは法律違反なんですよ。危険「黙れ！」……」

一人の切れやすそうな男が大声上げる。

「よお、姉ちゃんよ、あんまり変な事言つと怒るよ？」  
どっちがふざけたことを言つてるんだ？彼女は怒りを感じる。

「お客様、こちらにも事情があります、お戻りください。」

「てめえ……こちらが女だからと言ってようし「女を囲んでいじめか？はっ、ばかばかしい。」なんだてめえは！！」

男たちの後ろからするりと割り込み上山の前に立つ男

「何だと言われますと……まあしがなきこの列車の運転士ですが。」

その男は、神田功である。しかし彼は168cmと小柄、上山とは3cmと変わらない、そして彼らはどれも170後半から180、

かなり分が悪いように見える。

「ふーん、で、運転士さんはどうゆう意見で？」

「ええ、車掌の彼女の意見が正しいです。さっさとお戻りください。」

「丁寧の中に怒気がこもってる。そして彼女にしか見えないように、指で太ももを叩く、このモールスは前方支障無しの意味、つまり大丈夫だということ。」

ドキッ

あれ、一瞬彼が頼もしく見えて。小柄なのに背中が大きい、そういえば彼……。

「ん？お口が悪いですね？喧嘩3段（笑）の俺に喧嘩売ってるのかい？」

リーダー格の男がにやりと笑う。しかし神田は動じない、むしろ高笑い。

「何がおかしい！」

「くくく、いやね、俺はな、徒手格闘競技優勝の自分に言うのかい？」

「徒手格闘?!」

徒手格闘とは、毎年死傷者が出るくらい激しい競技、普通警察や自衛官の競技。彼が戦闘の構えをすると非常に様になる。

「てめえ、覚悟「ドゴーン!!!」へっ?」

「ごめん811系、自慢の拳で車両に思いっきり打ちつける。そして睨む。」

「お・も・ど・り・く・だ・さ・い。ね?」

「……」「コクコク」

全員が頷いて車両に戻る。後続で降りようとしたお客も戻る。彼は素早く非常手動扉開閉レバーを戻し、扉を閉めるそして外からスイッチ押しして固定する。

「さて、上山さん、乗務室に戻りましょうか。」

「あつ、はい。ありがとうございます。」

彼女の微笑、

ドキリ

神田は少し固まる。これがクールレレ、クーレレなのか？！  
そう、気付いた方は気付くだろう。

いわゆる一目ぼれの両想い……。」「この作者馬鹿だろと思った  
皆様！何をいまさら。」

「あつ、えと、よし、戻るぞ。」

「了解。」

また戻った。そして二人は持ち場に帰る。その時。

「ああ、神田さんのあの姿。」

「ああ、上山のあの微笑。」

「もう一回見たい！」

小声でハモってた。

15時02分

三雲鉄道運行指令室

「これしか方法がありません。」

「しかし、前代未聞だぞ？この方法……。」

「そうです。普通はしません、しかし今日は特に忙しい日なので。」

「しかし……。」

「信号現示は狂ってますが、システムは生きてます。」

末田が進言する。それはとある事がきっかけしてた。

14時52分

三雲中央自然公園第二閉塞信号

「あー、まずい。状況がまずい……。」

H1344運転士、木下夕きのしたゆうが呟く理由、それは……。

カンカンカンカン。

見事に踏み切りに横たわっている。ああ、踏み切りの遮断機の前で  
怒りに燃える通行客の皆様の顔が……。離菊線でこの踏み切りで

赤信号で止まるのは、かなりプレッシャーを感じる。

「どうしようかな……。」

呟いた時。

「こちら三雲中央自然公園駅駅長、H1344運転士、応答願います。」

「？、はい、H1344運転士です、どうかしましたか？」

「はい、そちらの車両は踏み切りまたがってますよね？」

「ええ、目の前が何故か信号が赤黄青ついてて、どれに従ったら……。」

「じゃあ警戒運転してください。」

「あはは、H U Z A K E R U N A。冒進しろと言っんですか？」

「ああ、こちらの信号管制では青だ。とにかく信じて15km運転を。」

「……、了解。信じます。ちなみに指令室には……。」

「言っわけ無いじゃん。」

「あはは、減俸分補填してくださいよ。」

「りょーかい。」

「軽っ?! まあいいや、運行許可「？」確認、出発進行」

これで前代未聞の大作戦（笑）が始まる。

**第四話 電車の停止とストレスの比例式 後編(前書き)**

済みません、更新遅くて。無線LANがつかない！

## 第四話 電車の停止とストレスの比例式 後編

3月3日

15時05分

戸井山駅手前

「H1678、通信願います、H1678、通信願います。」

「はい、こちらH1678運転士です、どうしましたか？」

「はい、これから捻破りを行います。」

「はあ。」

神田は何を言ってるのかさっぱり分からない？と、前を向くと、駅員が走ってる？持ってるのは赤色旗？

「まさかと思いますが……。」

「実は信号機は死んでるが、ATS-Pは生きてるんだ。赤色旗で信号代わりにする。駅員は駅で管理してる信号確認ディスプレイの情報をインカムで伝えて、手旗信号です。」

「……、前代未聞……。」

「前例はありませんが、これで。」

「了解です、三雲の挑戦に驚きました。」

「では、戸井山、11分に発車、時速70kmで風雅駅14分停車、後続の急行、H1699の追い越しの後は、なるべく回復運転を実行してください、ただし、三雲中央自然公園では徐行運転必須でお願いします。」

「戸井山、11分に発車、時速70kmで風雅駅14分停車、後続の急行の追い越しの後は、なるべく回復運転を実行、ただし、三雲中央自然公園では徐行運転必須。」

「復唱オライ、それではお願いします、通信？002、通信者、末田。」

神田はまた通信ブザーで、上山に連絡取るうとするが、妙に気恥ずかしい、今まで持ったことのない感覚。今はふっ切らないと！

ツ・ツ・ツ・ツ

・・・

ツ・ツ・ツ・ツ

何だ、この微妙な間、上山さんなら一瞬で返信来るのに・・・用事か、それとも俺のことをあまり好かない?! 後者は嫌だ! と、考えてないで返信貰ったから連絡。

「どうしましたか? 神田運転士?」

「ああ、電車運転を再開します、発車許可を。」

「通信で大体把握してます。了解しました。」

「お願いします。それでは安全運転努めましょう。」

通信電話機を置く、そして。

ツ・

発車許可。

「出発進行、戸井山駅停車8両。」

ブレーキを解除して、静かにマスコンを入れる。

上山サイド

戸井山駅から走り始める車両、運転再開の旨をお客様に伝える。今日はこの遅延が夜まで続くだろう。今頃遅延回復と終点、みくもみやこやしろ三雲都社駅から三雲線相互乗り入れの調整をしてるだろう。

「次は風雅、風雅でございます。お出口は右側です。3番線より16分発、急行、三雲都社行きにお乗り換え出来ます。本日は電車の遅延にお客様のご迷惑になりましたことを深くお詫び申し上げます。」

いつものように次駅案内を終えて放送マイクを置く。

「ふう。」

今日は疲れることが多かったな。でも、今日の遅延のおかげで、好意を持てる人が・・・て

「何考えてるのあたし?!」

上山は珍しく大声をあげてしまい、それが最後尾の車内に漏れてお

お客様に振り返られたのには彼女は気付かなかった。

## 報告書

三雲レイルウェイスタッフ管轄、雛菊線信号故障に関して。

今回の事故の原因は、今度新規路線として導入される、「JR特急「みぐも」の河野宮行きこうのみやの相互乗り入れ対応の為に設置した新規信号機のプログラムミスの影響が全線に響いたとみられる。

今回の事故の件で、プログラムミスは解消され、また、保線事業部には一層の注意を払うよう警告、今回の事態の收拾にします。

最後に、前代未聞の駅員信号は、国土交通省からの嚴重注意を受け、今後は禁止とす。

## 辞令

神田功運転士を、今日付で、三雲レイルウェイスタッフ管轄、雛菊線へ転籍を命ず。

#### 第四話 電車の停止とストレスの比例式 後編（後書き）

基本この小説は

神田功

上山絵奈

後に登場の小暮仁

同じく佐藤章

を中心に

後は色んなキャラが何度か出てきます。

恋愛フラグは立てますよ、もちろん！

キャラ設定

上山絵奈24歳

身長162cm

体重46kg

誕生日3/18

趣味、所属の雛菊乗務区に居座るねこと戯れること。鉄道を眺める

こと。待機線での休憩時に飲む紅茶

県立雛菊高校卒業

三雲レイルウェイスタッフ入社

18歳、雛菊線雛菊駅員

20歳、緑風環状線「緑風線が一般呼び名」大和駅駅員

22歳、雛菊線雛菊乗務区駅員

今に至る。

## 第五話 入学式ラッシュ前編（前書き）

お久しぶりです。

リアルと2本の小説執筆で、こっちが完全お留守でした、済みませ  
ん。

これからも不定期ですが、お願いします。

## 第五話 入学式ラッシュ前編

4月9日

5時00分

三雲中央公園駅

三雲中央駅、雛菊駅間を走る雛菊線、三雲駅、中央緑風駅間を結ぶ三雲線の合流駅で、乗降客数は4位の大規模駅。しかしある分野では一位だ。それは

中高大学生通学者数の数である。この駅は半径1キロ以内に学生御用達の寮集合体が存在し、他にも、神田が卒業した三雲工業高校、三雲南高校、進学校で私立威風学園、私立百合中学など、学校が多い、そのため通学で降りる学生乗る学生多い。

そして今日はほとんどの学校で入学式……地獄の一日が始まる。

6時15分

三雲中央公園駅

三雲鉄道side

朝の緊急集会だ。毎年行われる。今日はこの駅所属の駅員は休み返上で全員集合だ。駅長の見澤みさわ勇氣が周りを見て。

「よし、今日は分かっているとと思うがこの駅は忙しい、入学式ラッシュだ。定期券売り場のお客様の整理、ここを使用する学生、保護者様の質問に丁寧に応えること。ストレスや疲れでさぼったら、労働基準法ギリギリの仕事一カ月の刑だ」

三雲線担当の三雲鉄道駅員の顔が変わる。この人はマジドSだからだ……。

「あの、レイルスタッフの方の駅員は……」  
一人の駅員が聞く。

「彼らは彼らうちはうちだ」

ここでブーイングは言わない、言ったら……ガクブル。

「よし、接客は真面目に、お客様には常に笑顔でどんな状況も臨機応変、さあやるぞ！」

「……はい！お客様第一に！お客様に元気と笑顔を！」

三雲レイルウェイスタッフs i d e

こちらにも集会をやっている。駅長の結川達也ゆいかわたつやが前に居る。

「さて、今日は年間でトップクラスで大変な日だ。分かっているとありますが、さぼったら……まあ、うん……」

「……何があるんですか?!?!?!」

「気にしたら負けだ、さて……」

結川は息を吸い

「誠心誠意お客様第一！疲れたお客様も暗いお客様も明るくする駅にする！」

「……はい！」

「解散！定期券売り場は頑張れよ！」

ちなみに文化祭も大変そうに見えるが、意外と駅に学生が派遣されて、案内してるから入学式より大変でない。

それより前

6時

三雲運転区

「夢山入ります！」

今年26でまだ指導員から離れたたの新人運転士、夢山俊ゆめやましゅんが点呼に入る。車掌ならエースだが、運転士ではまだまだである。「レベルはちゃんとしてるが自信がない」

「じゃあ夢山君、点呼を宜しく」

「はい！それでは……」

夢山は乗務予定表と手帳を読み上げる。

「はい、それでは質問です。今日、保線さんが除草する所は？」

「はい！南緑風駅構内と星川駅構内です！」

「良く出来ました」

運転士が忘れてないか、点呼担当の人は質問する。事故防止の為だ。

「ああそつだ、車掌時代に経験してると思っけど今日は入学式、三雲中央公園駅では特に安全運転をよろしく」

「は・・・はい」

夢山は完全に忘れてた・・・怖いな今日・・・。

同時刻

雛菊乗務区

「おはようございます、神田さん」

「おはよう、上山さん、今日はよろしく」

「よろしくお願いします」

神田と上山は両方一目惚れながら、両方とも相手の気持ちを知らない。1週間ぶりに同じ乗務だ。ちなみに雛菊線には面白い風習があり、運転士車掌は一日の乗務を一緒にこなす。今日の二人は早朝から午後5時までだ。

そのまま点呼に行く。

「助役さん、お願いします」

「はい、じゃあ神田君、上山君お願いします」

2人は点呼を開始して質問も答える。

「はい、問題ありませんね、特にとってありませんが、留意すべきは午前と昼あたりに三雲中央公園駅の入学式ラッシュに注意ください」

「入学式ラッシュって・・・」

「あゝ、それは・・・上山君、乗務前に説明しなさいね」

「え？」

区長は噂で上山が神田の事を好きでいると知ったので、喋るチャンスを与える。上山は軽く赤面。

「分かりました。」

「それでは点呼終了です。今日も一日安全運転をお願いします」

「はい！」

2人は同時に敬礼、退室する。

「で、入学式ラッシュとは？噂でしか聞いた事がない」

歩きながら神田は上山に聞く、内心神田は彼女に聞くのは緊張する。

「簡単に言いますと、学園都市並に学校が多い三雲中央公園駅が、

入学式の影響で、通学下校が同じ時間帯に集中したり、定期券発券

で奔走したり、乗車率が高くなったりするので入学式ラッシュです」

「へえ、そんな風に言われてたんだ、俺は三雲工業卒業なんだ。」

自転車で通える範囲内だったから三雲中央公園駅がそうなるとは知らなかった」

「そうなんですか。意外です、ふふ」

上山が軽く笑みをもらし、神田は軽く硬直。やっとこ口が開くと

「そういえば、上山さ」あの・・・」なに？」

神田は少しビビる、もしかしてなんか気に障った？！

「済みません、話を区切らせて、あの、神田さんは先輩ですので・

・さん付けは無しでお願い出来ませんか？」

「うーん・・・上山・・・でいいの？」

「はい！」

上山は、さんを付けられるより身近な感じがするので、あえてお願いした。神田も少し照れくさそうにしている。

「そういえば、上山はどこ的高校なんだ？」

「雛菊高校です」

「雛菊高は確か雛菊線の椎名駅だな。何でそこに？」

「本当は三雲市に憧れてたんですけど、ここ的高校はこの会社の特別枠、コネを持ってて鉄道の好きな私はそこへ」

「へえ、俺も鉄道が好きでここに来たんだ。偶然理由が一致とは」

「あと、もうひとつあるんです」

「なにか？」

「出庫点検まで時間ありますね、聞きます？」

「ああ、聞かせてくれ」

「それでは・・・あれは雨が降りしきる6月の事でした・・・」  
上山は語りだす。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3267/>

---

三雲鉄道日記

2010年10月10日06時09分発行